

Sea Times

8
Jan 2004

女性リーダー座談会 その2



左下「流水池（雨水の有効利用）」中央「初冬の銀杏」 右上「日時計」

記事

表紙・目次.....	1	21世紀 COE プログラム 「誕生から死までの人間発達科学 - 生涯発達追跡センターの構築 - 」の現況.....	7
女性リーダー座談会 その2.....	2	お茶大メールマガジン「お茶メール」創刊.....	8
4つの機構、11の室 - 法人化にあたっての組織改革 -	5	生活科学部生活環境学科の改組.....	8
日本で研修を受けた アフガニスタンの女性教員を訪問して	6	学事予定・編集後記.....	8

女性リーダー座談会(2/2)

現在お茶の水女子大学では、学長のほか、部長クラスポストの半分近くを女性が占めています。この女性リーダーの皆さんに集まっていただき、お茶大の現状や課題について話し合っていました。座談会は平成十五年九月九日の夜、学長室で行われました。

出席者

- 本田 和子 学長
- 篠塚 英子 学長補佐(今回の司会)
- 波平 恵美子 ジェンダー研究センター長
- 平野 由紀子 人間文化研究科長
- 内田 伸子 子ども発達教育研究センター長
- 室伏 きみ子 理学部長ライフワールドウォッチセンター長

篠塚 法人化後の中期計画では女子大として行く方向ですが、その後の皆さんの展望をお聞かせ願えますか。

本田 今は乗り切ったと思っておりますが、十年先は読めません。(中略、前号に掲載)お茶大は小さいけれども日本にあって然るべきだという認識を、行政はじめ一般納税者に持っていたければ、その後も大丈夫かなと思っております。国際的な拠点として、ジェンダー研究とか発達研究を考えたなら、お茶大抜きでは語れないみたいにしてしまえばよい、そういう形に持っていく事が必要なと思っております。



(以上、再掲)
室伏 お茶大に対する外の方々の評価が思ったより高く、暖かく見守って下さるといった風ですので、私は今までの資産を十分生かして、更に発展させて行けば二十年ぐらいは持

つだろうという気がしております。ジェンダーや発達研究がお茶大の顔になっていくことは確かですし、顔になれる分野は他にもあると思うのです。それらを看板にして、そこでしっかりとした研究も続けていければよいと思います。



室伏理学部長

また、お茶大で育ててきた女性リーダーというのはいずれ半端ではないです。一昨年(平成十三年)に理学部卒業生の活動状況を調べたのですが、皆さん非常に輝いています。その事をまとめてグラフィックを作成して、今年(平成十五年)の日韓女子大学フォーラム(これは梨花女子大と日本女子大、お茶大の理学部の間で開かれているフォーラムですが)で発表しましたら、皆さん非常に素晴らしいと、うらやましがって下さいました。今まであまり外に対して宣伝してこなかった大学ですから、こういうことを一般の方々に認知して頂いたら、お茶大のファンを増やす事ができるかなと思うのです。

篠塚 今の話で、アカデミック分野で活躍している方は確かに多いのですが、奈良女とお茶大の卒業生のライフコースの調査をした時に、三分の一が働いている、三分の一がパート・アルバイト、三分の一が専業主婦という事でした。専業主婦だった人も最初は就職するのですが、それが長続きしない、これをもったいない。多くが学部卒業生で、民間に行っても長く役に立つような人材に育てなくちゃならないと思えます。

本田 専業主婦が悪いとは思いませんが、そこで、不満を持って、本当は働きたいんだけど思っているか、そこでキラキラした生き方を探せるか、そういう事もフォローする必要がありますかと思えます。再び学びたいと言う方達に、大学が門

戸を開く必要がありますね。
本田 キャリアアップ支援やチャレンジ支援はしなければいけないけれども、それをお茶大がアタフタとする事はないんじゃないかと思っております。あわてて追いかけても、力を分散するだけです。お茶大が持っている資源をどこで一番発揮できるかを考えてデザインする事が必要だろーなと思えます。

篠塚 そうですね、そうなるかと、どうして大学の対応は時間がかかると思えます。それで、即効性を考えて学術事業会のようなものを作ったのです。それによっているいろんないろんな形で活躍しております。

平野 学科の枠を越えて、出合える場になっていきます。お子さん三人もいる方も働いて下さってるし。

内田 通信制の大学院があつちこつち出ていますけど、あのやり方で十分な指導が出来るかとも心配しています。また、状況の変化に即応して組織を変えようとしても、各部署の利益代表という観点で対応しようとする事が多く、大学全体の大局的な視点からの対応ができてなくなっているように思われます。

本田 今、ものすごく早く動きますよね、こんな小さい大学なのに伝わっていかないんですね。時々とんでもない事を聞きにいらいらするんですよ。それと、日々ちよつと変わる所もありますよね。そういう事をどうやって伝えたらよいかと思っております。情報の温度差が大きいと思っております。



本田学長

篠塚 学長が大変でなければ、原稿を書いて秘書を通じて全教職員に電子メールを出しちゃうというのはどうでしょうか。
平野 教授会の冒頭でね、テレビで、部長会議の報告なんか、同じものを流しちゃうと

かいか。人が中に入って報告するより、学長が直接言つて下さった方が正確に伝わる。小さい大学なんですものね。

篠塚 でも、他大学の説明を聞きましたら、法人化に向けて、情報伝達にはどこも苦労しているのですよ。うちはまだよい方だと。内田 情報を皆さんに伝える仕組みが必要ですね。私がお茶大の今後を、あまり楽観的には捉えていないのです。多分お茶大は毎年1%、約七千万円ずつ運営費交付金が削減されていく(注)。国立博物館の様に二〇%以上減らされた所もあります。その状況の中では組織を見直し、本学の特色を出していくための組織強化と同時に、基礎研究で時間のかかる領域や、工学系のようにすぐお金がとれない領域も維持し地道に育てていかなければ。そのための組織の見直しができないと六年ちやんと維持できるか難しい気がします。

本田 私達四人はお茶大育ちなので、共学でお育ちになつた方々に意見をいただいた方がいいと思いますよ。

篠塚 女子大に勤めた事は、違和感なくすんなり入れました。ただ、学生が女性だけで勉強するのは困るなと思います。時々男子学生を一人二人入れたりと、今までたくさん話をしていたのに、とたんに話せなくなつちやうのですよ。男性と考え方の違いを対等に議論する事に慣れないといけませんね。問題は、社会に出た時の揉まれ方が違います。卒業時の職業選択の時からかなり差がありますよ。その他アカデミックな面は全然差はありません。問題がそれだけなら女子大のままで授業形態の工夫でなんとかなるのですが、一人では限界がありますね。通常授業でも何らかの形で共学大学と交流したり、年に一度くらいは(男子学生との)討論の場が必要ですね。



篠塚学長補佐

私が工夫していたのは年一回夏休みに他大学の男子学生たちと合宿をするという事です。波平 これだけ共学の門戸が開いた中で、それでも女子大に来ようと選択をする母集団が変わつて来ているんです。優秀でまじめなんです。良質の野心がありません。居心地のよさを求めている学部学生が非常に多いと思います。ですから、もつと伸びるはずなのに、なぜかハードルが越えられなかつたり、自分で天井を決めてしまつて伸びようとしない学生が多いです。ですから、よい意味での競争心をおおるような、また、全学生に見える形で、優秀な学生を褒め称える場があつたらいいと考えております。それとお茶大の学部学生はマナーがよいです。いろんな面で言わなくても、察して理解する部分をたくさん持つています。ですから、そうでない人達の中に入つて勉強や仕事をすると、もたつに渡り合つていく力をつけて欲しいです。そして競争をおおれず大学院に上がつて来て欲しいです。



波平センター長

内田 心理学コースは、学部のトレーニングをそのまま持ち込んで修士に行けば、本当によい研究ができる人がたくさんいるんです。大学院に上がつて来てくれるのは、やっぱり三分の一ですよ。もつたないです。ただ、女子大の環境で伸びると、共学に行つて他流試合した方がよいのと、二つのタイプがあると思われれます。

本田 アメリカでデータが出てた事がございましたね。女子大で育つたから主体的にものを考えて、表現力やプレゼンテーションする能力が伸びて、男の世界に入つても困らないという、ただ、全てがそうではないという。育て方もあるんでしょうけど。ところで、理学部の生物や化学は八〇%ぐらい大学院へ上

がりますよ。

平野 また話がずれますけど、日本語教育の修士課程は学部の専門がどういうバックグラウンドでもいいという事になっていきますよ。その中で、本郷逕子先生(元文教育学部教授平成十四年退官)は「お茶大の卒業生は力がある」とおっしゃるのね。ある時まで家庭や別の所に就職していたとか、違う事をしていて、また勉強しようという時に。

篠塚 話を戻して、平野先生、お茶大の希望、展望、あるいは暗澹たる不安でも一言お願いします。

平野 そうですね、お茶大は、いつもいづもどうして国の税金をいただいで女子大が必要かって、問われていましたよ。それをしのでいいのでやってきたわけです。その中で本田先生が、私達卒業生の中で初めて学長になられたでしょう。鳥を立ち去る最後の女王になつたらどうしようと思つていました。したら先生は、見事に、アフガンの事にして、女子教育の視点の中にお茶大を導きましたよ。今までは「おんな子ども」の領域として、軽んぜられていた側面を二十一世紀は積極的に探求する時代でもあるし。本学の経験を積極的に今の時代に生かして。

室伏先生のように楽観的に言つて下さる同世代の方がいると、私も希望が持てるかなという感じね。

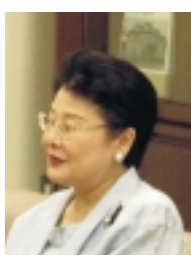
本田 でもね、最後の女王だったんですよ。就任早々の頃は「女子大の使命は終わつたんじゃないか」とか「あなた、卒業生だから、綺麗に幕を引いて下さい」なんて言う人達がいたんですよ。それでなんかむきになって、やれる事は全部いたしましたよ、みたいな事、やつたんですよ。

篠塚 平成十三年二月に学長に就任されて、六月に、ちょうどトップ三〇の話が出て、危機感がすごかたかまつている中、翌一月に急にアフガン支援の話が持ちあがつて。最初本田 そうなんです。(学長就任して)最初

(注)十二月段階では運営費交付金は1%、一億四千万円カットが見込まれている。

の国立大学協会の総会がそれ(トップ三〇の件)だったんです。アフガンの件は藤枝先生様々でね。それからCOEでしょ、なんかとにかくラッキーが続きました。もちろん、皆さんにお力がおありになったからなんですけどね。そうするとね、お茶大は、あの規模でやれるじゃないか、COEは二つとるし、何でも、お茶大は小規模大学の中でダントツ光っていて、希望の星だそうなんです。

内田 「大変なんですよ、うちの大学は」って言うと、皆さん「そんな事ないでしょう」とおっしゃるんですけど。でも着々と学内で準備していかないと、厳しいと思います。御船先生と竹村先生と私の三人で、天野郁夫先生(国立学校財務センター研究部長)に財



センター長 内田 政面のお話をうかがって、これは大変だから評議会の先生方にも知っていたらいいなと、その後平成十四年七月、お呼びして講演して

いただいたんです。本田 天野先生が強く主張されていたのは、研究中心、教育中心、専門養成の大学種別化だったんですよ。ただ、お茶大は、研究もそこそこできる、教育だって大切にしたいと思ってる、専門職大学院はちよつと無理だと思っけれど、臨床心理士・遺伝力カウンセラーとか、専門家も育てたりしている。そうすると非常に曖昧な大学になるんですね。その中で特色を出すためにはどうしたらよいらうかという所、これは非常に苦労したんですね。まず研究と教育のよい点の強調は大切です。そして両方をバランスよくそれなりのレベルでやっていく事。そしたら、周りから、ああいう小さい組織だからできるのかな、あれはモデルになるかなと思われる事を期待してるんですけれどもね。種別化の話は底流にまだあると思います。

平野 話がまた戻るようですね、卒業生がね、先生に会いに行くって時に、そんなに嬉しそうに顔するなんて信じられない、って言われるんですって、だから学生にとってみるとよい師に出会ったっていう大学みたいなのね。ただ、そういう卒業生や学生と一緒に何かするっていうのができないんですよ、今、忙しくて。それが、一番心配。

本田 それでね、二年なら二年間、観念して忙しくしていただいて、あとはゆっくり教育や研究に力を注いでくれたらと、組織を検討しているんですけどね。

内田 その新しい組織がちゃんと機能するためには、状況の変化についての情報を構成員みんなが共有できる状況、調べればどこかに開示されている状況の中で対応していかないと。新聞を作るってアイデアもありましたね。

本田 附属高校で申し上げたんですが、方向は示さなければいけないので、示しますが、中身はご自由に検討なさって、やりにくいと思ったら違う提案をなさって下さってよいんですよ、と申し上げたら、びつくりなさってました。部局長会議が力を持って、そこでの決定が硬直化して取られているんですよ。篠塚 新聞も大事ですけど、今はメールが何かで、部局長会議や評議会で決まった大事な事は直接全員に行くのが一番よいと思うんです。企業はみんなそうやってるのですね。

本田 来年から秘書室のようなものが作られるので、そういう事をやって下さる方がいれば、より機能するでしょうね。

篠塚 最後にちよつと私から。先程学長から出ましたが、今後の大きな要因の一つに財政基盤の事がありました。そこでとにかくお茶の水芸術事業会というものを創りました。そ



平野 研究科長

の会員に卒業生はもちろんですが、女高師の方に声をかけたら、入会増加の貢献では驚くべきものがあります。その中のお一人が生前遺産をお茶大のために残したいという申し出がありました。その方はアフガンの女子教育支援にご賛同なさっているのです。このような動向は色々な所で公表すれば、次に続く方が出てくると思います。この方は女子の教育に一番の関心があるようです。これから女子大でいく事になっていきますけど、その先についても何か指針を出さないと難しいかなと思います。

波平 卒業生の方から、お金を集める時に、明確な目的を示して欲しい。事業会だ何に使用されるか分からない、ということ聞きました。それと、私は調査のために全国を回っていますが、地方経済の落ち込みがとてひどいです。今までお茶大に学生を送っていた方々が都会に子供を出せなくなっているんです。そこで一番困るのが住居費で、月五万円くらいの寮の部屋が三百とか五百とかあれば、それをセールスポイントに学生を呼べると思います。

本田 そうですね、少し高くして広めの部屋もちよつと作って。あと、お金をどうするかって所ね。学術事業会だと、募金の時に特定の目的をあまり出せないんですよ。

篠塚 そうですね、NPO法人では限界があるので、いずれ後援会組織を創りたいと思っています。また、財政基盤に関しては課題もありません。予定した時間も過ぎていきますので、話は尽きないのですが、これでおしまいにします。ありがとうございます。(完)



四つの機構、十一の室

法人化にあたっての組織改革

副学長（教育・厚生補導担当） 市古 夏生

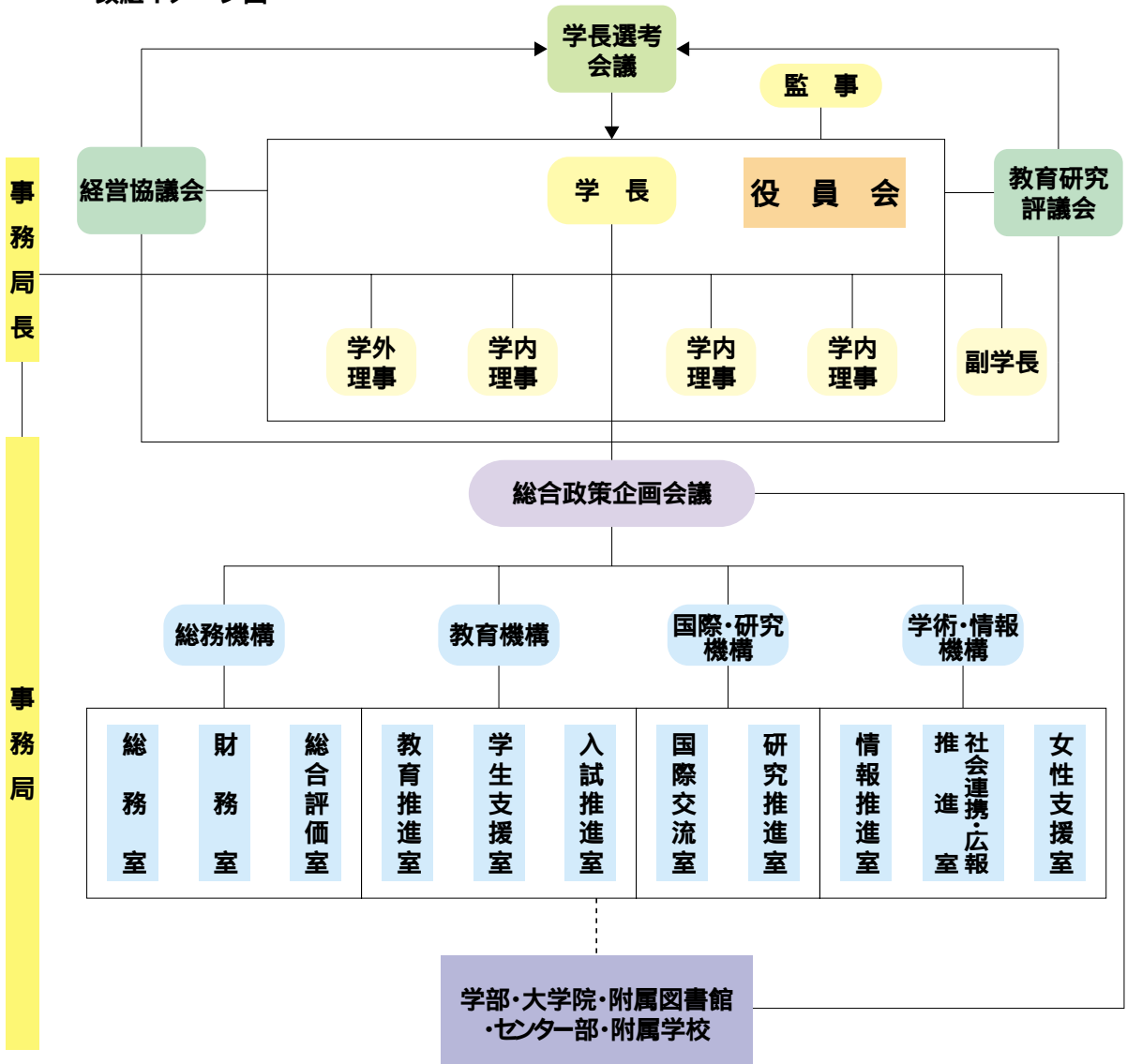
平成十六年四月から国立大学が法人化され、新しく国立大学法人お茶の水女子大学が誕生します。自己収入（入学金、授業料、検定料など）に国から交付される運営費交付金を合わせた資金を元にして、学長兼理事長が大学を運営していくこととなります。学生、教職員という主要構成員は今までと変わらないのですが、こういう新しい事態に対処するには、組織も変えていかざるをえません。

国立大学法人法に定められている、役員会、経営協議会、教育研究評議会を設置することは当然のこととして、それ以外にも新たな組織を設けます。その中で重要な役割を果たすのが機構、室体制です。理事及び副学長が機構を束ねますが、トップダウンとボトムアップを併用して、大学の政策の実行性を高めるために創出する組織です。

室長には評議員をあて、責任をもって室に関する懸案事項をさばくとともに、企画立案、改善などを積極的に行うという設計をしています。室員には教員が参加することは勿論のこと、事務局からも参加することによって、本来の意味で教員と職員が車の両輪となって大学全体のことを考えつつ、新たな歴史を構築していくことという事です。やる気、根気、実行力のある室員を評価するシステムも考えています。

学生に入学してよかったと思われる大学、学外の方々によい意味での変貌を感じていただける大学、学内の教職員に働きがいのある大学とするための新体制作りです。

改組イメージ図



日本で研修を受けたアフガニスタンの女性教員を訪問して

人間文化研究科助教 勝野 正章

平成十五年九月にアフガニスタンの首都カブールに約二週間滞在し、二月から三月にかけて行われた「アフガニスタンの指導的若手教育者のための研修プログラム」に参加した女性校長と大学・教員養成カレッジの女性教員を訪ねてきました。五女子大学コンソーシアムの座長でもある箕浦康子先生が代表を務めている研究プロジェクト（日本学術振興会からの科学研究費補助金を受けています）の一環として、研修の成果がどのように生かされているのかを実際に研修参加者の学校や大学・カレッジを訪問し、「目で見て、耳で確かめよう」ということが目的でした。



一年生の教室

ることができて、とても励まされたといえます。今回の訪問では、その校長先生たちが劣悪な教育環境（校舎や施設・設備）のなかでも、生き生きと教育の仕事に取り組んでいる様子を見ることができました。校長先生たち

研修プログラムに参加して、

校長先生たちは戦後の日本が国家再建の要に教育を位置づけて重視したことを学び、自分たちがいまアフガニスタンでやるべきこととして、この意義を確かめる

は、自分の学校に帰るとすぐ、研修で学んだアイデアを他の先生たちに伝え、新しい取り組みを提案して実行に移していました。たとえば、帰国してから学校に保育所（託児所）を設置した校長先生が何人もいました。これは、本学の「いずみ保育所」を見学して女性教員が安心して働けるためには、こうした施設が必要であることを痛感したからだそうです。また、校長先生たちは、研修プログラムで訪問した日本の学校の雰囲気がとても家庭的で親密であるという印象を持つたといいます。そこで、自分たちの学校でも、生徒の作品を展示したりするなどの工夫をして、生徒たちが安心して「居る」ことのできる学校にしようとする努力していました。戦争と混乱のなかで子どもたちが学校に行きたくても行けなかったアフガニスタンでは、こうした課題はどの学校でも共通するものなのでしょう。



生物の授業

学校を訪問すると、どこでも大歓迎を受けました。それは五女子大学が行っている「アフガニスタンの指導的若手教育者のための研修プログラム」をはじめ、日本の教育復興支援が評価され感謝されているからにほかなりません。授業の様子と学校施設を見せてもらった後、きまってるまわられたチャイ（お茶）とナン（パン）のおいしかったこと。実を言うと、私は冬の研修にほとんど貢献していなかったものですから、心のこもった歓迎

に感激するとともに、研修プログラムを実質的に担われた方々に対して申し訳ない気持ちにもなりました。そして特に感激したのは、いくつかの学校で子どもたちが民族音楽で歓迎してくれたことです。歌の言葉は理解できなくても、心は十分に伝わります。この歌声を私が独り占めにするのではなく、日本に持ち帰ることができたらと思います。とりわけ、校長先生たちが本学を訪問したときに、エイサーを披露してくれた附属高等学校の生徒さんたちに聞かせてあげたい。いまはまだアフガニスタンと日本の間を行き来できる人は限られています



歌で歓迎してくれる子どもたち

が、近い将来、両国の子どもたち、若者たちが自由に交流しあうことのできるようになることを強く願わずにはいられません。今回、私が行った調査のレポートは、本学のホームページ（「アフガニスタン女子教育支援」：インパクト調査報告）に掲載していますので、ご関心のある方はぜひご覧ください。



仮校舎の中の教室

が、近い将来、両国の子どもたち、若者たちが自由に交流しあうことのできるようになることを強く願わずにはいられません。今回、私が行った調査のレポートは、本学のホームページ（「アフガニスタン女子教育支援」：インパクト調査報告）に掲載していますので、ご関心のある方はぜひご覧ください。

21世紀COEプログラム

「誕生から死までの人間発達科学
・生涯発達追跡センターの構築」の現況

人間文化研究科教授 内田 伸子

(拠点リーダー)

現代は子どもにとっても大人にとってもまことに生きにくい時代です。科学技術の発展や少子高齢化の進展、グローバル化の加速に伴う変動期を迎えた今日、人は様々な発達段階や移行段階で多様な危機的移行に遭遇します。発達過程の多様性や発達課題の達成度の差異が累積していく人生の後半期ほど、危機的問題の幅が拡大していきます。このような深刻な課題をかかえた状況を打開するために、現在、発達科学は、特定の発達段階にのみ焦点をあてるのではなく、長期的なライフスパンのペースペイクティブに立つて、誕生、死にいたる各ステージ内・ステージ間の移行、異なる移行を体験しつつある異世代間の対話や相互作用のメカニズムを解明することが急務であると考え、「誕生から死までの人間発達科学・生涯発達追跡センター」を形成いたしました。この拠点は二〇〇二年度の21世紀COEプログラム(人文科学分野20件)に採択され、昨年(平成十四年)十月からこの拠点を担う事業推進者たちを中心に、大学院人間文化研究科人間発達科学専攻の各講座のスタッフ、大学院生からなる機動性の高いプロジェクト体制を組み、プロジェクトを開始しました。

現在、本拠点では、四つのプロジェクトが進行中です。第一に、心理学系のスタッフが

中心になって推進する基礎的心理発達過程を解明するプロジェクトで、テレビゲームやビデオ視聴などの映像メディアが脳機能に与える影響、子どもの文化財と生活時間の変化、保育の質の変容過程などについての基礎的な実験研究、調査研究が行われています。第二に、発達臨床心理学系と子ども発達教育研究センターが中心になって推進しているプロジェクトで、フィリピンの貧困層を対象にした子育て支援研究、途上国の幼児教育支援研究、幼児期から青年期までのメンタルヘルス縦断研究、学校現場における個と集団をつなぐ発達支援プログラムの構築研究などを推進しています。第三に、教育学系が中心になって進める子どもから成人へのトランスミッションに及ぼす社会・文化的要因の影響を探るために日本の青少年の、学力・能力、アスペレシジョン、進路・職業生活について大規模な調査研究を実施しています。第四に、応用社会学や生活社会科学系が中心のプロジェクトで、四五〜六五歳の中高年女性の危機的移行と社会的・福祉的支援の長期縦断追跡を実施しております。これは、質問紙調査に加えて人手と時間のかかる面接調査も組み込んで精力的に研究を推進中です。



シンポジウムで講演する内田伸子先生

この拠点を形成して何よりも嬉しかった点は三つ。一つは、素晴らしいスタッフたちと共同プロジェクトを組むことにより、スタッフたちの競争、共創、協創の場が生まれたこと。二つ目は、研究シ

ステムを拠点事業推進に合わせ、有機的な連携を可能にするものへと改変する見通しが得られ、スタッフや院生たちの研究意欲が盛り上がったこと。

三つ目は、大学院生の指導体制の強化をはかる仕組みが強化されたことです。その仕組みの一つは、最先端の研究法論を知り、知の交流を目的とした教育セミナーやワークショップ、シンポジウムなどを定期的に開催していること、もう一つは大学院生への研究助成を目的とした公募研究制度を作ったことです。これは、教育上の意義があるだけでなく、事業推進者を中心としたスタッフ教官だけではカバーできない未知の領域や方法論を発掘し、プロジェクト全体をより豊かで生産的なものとするための試みでもあります。公募研究制度は研究一件につき上限五〇万円の研究費を支援するもので、研究計画の具体性、成果への見通し、研究の獨創性、学界への貢献度などから三段階の審査を経て受給者を決定し、その成果は原著論文として厳しい審査を受けて秋に公刊されました。以上のように、プロジェクトの第一の山場を迎えた採択二年目の今年(平成十五年)は、お茶大の個性を輝かせるような成果をあげたいと、一同、気を引き締め、プロジェクトを推進中です。発達COEでは、本年度難関を突破して採択されたジェンダーCOEとの緊密な連携をはかりながら、成果を出していきたいと考えております。

シンポジウムの聴講者
(本田学長や平岡教授も)

「お茶大メール」創刊

総合情報処理センター長 山本 秀行

あの福岡ダイエーホークスが阪神タイガースを破って、日本シリーズを制した二〇〇三年十月二十七日、わがお茶大にメールマガジン「お茶メール」が誕生しました。

発刊にさいしては、本田学長から、つぎのようなメッセージをいただきました。

「漸く電子情報の伝達網が張り巡らされ、日々の変化が素早く学内を駆け巡るようになりました。おくれればせながらのお茶大新時代の訪れ。

情報の共有によって、法人化という新事態に対処するための知恵と力が共有されることを期待しています。

(それにしても「オチャメール」とは、何とも「お茶目」な命名。こんなお茶目な情報が信頼に値するのかしら」と、ソツと独り言をつぶやいてみたりもします。

でも、多分、心配は無用。「.:」きつとお茶目な装いのなかでも真実は正しく伝えられていくことでしょう。」

編集局としては、学長の期待に応えないわけにはいきません。

いたずら好きな子どものように、学長室、教授会、附属校園、職員の世界を自由にとびまわり、情報が一方的なものになったり、味もそつけないものにならないように、つとめたいと思います。

そこでさつさつと、わがお茶メールに、「和子のひとりごと」というコラムをつくってしまいました。どんなひとりごとが掲載されるか、心配というか、楽しみでなりません。

いまのところ、本学の常勤教職員全員にむけた学内版が試行的に発行されています。慣れてきたら、在校生や卒業生にむけたものも発行したいと考えています。

生活科学部 生活環境学科の改組

人間文化研究科助教 大瀧 雅寛

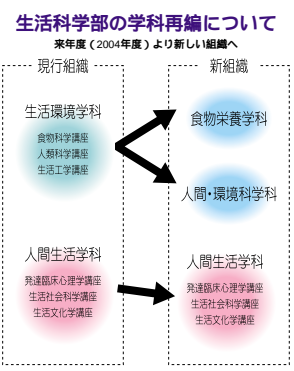
平成十六年度四月より、生活科学部生活環境学科が改組され、二つの学科(食物栄養学科および人間・環境科学科)が新設されます。生活環境学科は現在、生活工学講座、人類科学講座、食物科学講座から構成されていますが今回の改組は社会の変化に合わせて、より合理的な教育体制を持たせることを目的とし、二学科体制に編制し直すものです(左図参照)。

食物栄養学科は、食物そして栄養について、栄養分野の日本のリーダーとなる専門家の育成をめざす学科です。現在、管理栄養士の養成コースを申請しています。

人間・環境科学科は、人間の身体と環境との相互作用について、人間と環境の両面から研究教育することを目的としており、よりよい生活環境を創造するために具体的な評価・設計・提案を行うための研究と教育を行う学科です。

人間生活学科では、平成十六年度以降も従来通り、こころや社会そして文化の問題を取り扱います。

以上の三学科体制によって健康ですこやかな生活の実践、人間と環境との共存、個の多様性を生かすこと、安全でかつ公平な社会を形成することなどに積極的に貢献できるリーダーの供給を目指しています。



年度末・年度始の学事予定

(平成十六年二月)

- 二月二五・二六日 学部入学試験前期日程
- 三月十二日 学部入学試験後期日程
- 三月十六日 附属幼稚園卒業式
- 三月十七日 附属中学校卒業式
- 三月十八日 附属小学校卒業式
- 三月十九日 附属高等学校卒業式
- 三月二三日 卒業式・修了式
- 四月 八日 附属小・中・高等学校入学式
- 四月 九日 大学入学式・附属幼稚園入園式

編集後記

先日、エジプトで開催された国際学会に参加して参りました。会議自体も有意義なものだったのですが、合間を見つけて見学した古代エジプト文明の遺跡には、私の人生観を変える様なインパクトがありました。今から六・七千年前に起こったエジプト文明はその後数千年にわたって栄華を極めました。数千年間継続していた文明もしくはその組織の中で生きていた人々は、きつとその世が永遠に続くであろうか、自分とは全く別の文ではないでしょうか。自分とは全く別の文明およびその価値観が世界に君臨するような世が来るとはよもや思いもしなかつたでしょう。そう考えると、現在の価値観、評価基準というものがどれほど固定的なものなのか、ましてや時代の変化速度が昔とは比べものにならない現在においては普遍性とはあるのだろうかとの感をしみじみ深めた旅でした。

大学も昨今、社会からの要請の変化に合わせて様々な改革を求められています。今号にもお茶大における改革案に関連するいくつかの記事を掲載しました。私ですが、新しい組織を立ち上げるときの興奮とともに、世間の価値基準の激しい変化によって翻弄されるのでは無いかという虚無感に似た不安感も感じてしまうのが正直なところです。古代エジプトの民にはこの社会はどの様に写ることでしょう。

(編集長 大瀧)